

20. 亜急性甲状腺炎の ^{99m}Tc および ^{201}Tl シンチグラフィ所見に関する検討

福光 延吉 川上 剛 内山 眞幸
森 豊 原田 潤太 川上 憲司
(慈恵医大・放)

Retrospective に亜急性甲状腺炎と診断した 3 例の ^{99m}Tc および ^{201}Tl シンチグラフィ所見を検討した。 ^{99m}Tc シンチグラフィでは、びまん性に集積低下、 ^{201}Tl シンチグラフィでは、後期像で washout の遅延する傾向を、特に腫脹部位に一致して認めた。静注後 20 分間の ^{201}Tl の time-activity curve による解析では、悪性腫瘍と類似した所見を認めた。急性期と緩解期で経過を追えた症例では、急性期で認めた ^{201}Tl の washout の遅延は、緩解期では、認めなかった。甲状腺に腫瘍を有する場合、臨床症状、ホルモン値なども参考にし、悪性腫瘍との鑑別に留意する必要があると考えられた。

21. ^{99m}Tc -GSA 肝 dynamic SPECT を用いた LU3, LU15 による全肝および局所肝機能の評価

藤澤 英文 篠塚 明 武中 泰樹
(昭和大・放)
菱田 豊彦 (中央医療技術専門学校)

^{99m}Tc -GSA 肝 dynamic SPECT を行い、LU3 と LU15 の測定法とその有用性を検討した。収集 matrix は 64×64 。1 回転 90 秒で計 40 回転・60 分の連続収集を行った。ファントム実験よりキュリーメータから投与総カウントへの換算式を作成した。得られた画像データを 32 matrix に圧縮し、3.0~4.5 分と 30.0~31.5 分の各 matrix のカウントを対比し、上昇部分を肝の範囲とした。さらに 30.0~31.5 分での肝の最高カウントを求め、その 35% 以上の部分を最終的に肝とした。3.0~4.5 分と 15.0~16.5 分の画像を用い LU3 と LU15 を算出した。また各 matrix 摂取率の map を作成した。LU3 と LU15 は各種肝機能検査と良好な相関を示した。この方法では血中バックグラウンドの高い症例でも肝辺縁を明瞭に決定でき、map を作成することで肝局所機能の三次元的評価が可能である。

22. 脾臓自家移植例における肝・脾シンチグラムの有用性

菊池 善郎 大島 統男 白井 辰夫
横川 徳造 神長 達郎 古井 滋
(帝京大・放)

脾臓自家移植 9 例に施行された ^{99m}Tc -Sn colloid 脾臓シンチグラフィを経験したのでその有用性を検討した。対象は胃・食道静脈瘤および脾尾部腫瘍にて、脾摘術後に脾臓自家移植術が施行された 9 症例である。これに対し、べ 20 回 (うち SPECT 7 回) の脾臓シンチグラフィが行われた。脾臓自家移植は血管吻合を行わず、摘出脾の細片を移植するため、その生着を確認する手段は少ない。今回の検討では 9 例全例において移植片の描出が認められ、本検査の有用性が示唆された。

23. 脾シンチグラフィが有用であった脾摘後の副脾の 2 症例

川瀬 貴嗣 藤井 博史 橋本 順
久保 敦司 (慶應大・放)

スズコロイドを用いた脾シンチグラフィが脾摘後の副脾の同定に有用であった 2 症例を経験した。第 1 症例は、38 歳の男性で、悪性リンパ腫の治療で摘脾を施行した患者である。経過観察中の CT で胃の大弯側に小結節像を指摘され、臨床的にリンパ腫の再燃が考えられたが、脾シンチグラフィで、同部に集積を認め、副脾であることが確認された。第 2 症例は、45 歳の男性で、特発性血小板減少性紫斑症の治療で、摘脾を施行された患者である。経過観察中に再度脾機能亢進症状が出現したため、副脾の存在を疑い、脾シンチグラフィを施行した。左上腹部に集積が認められ、副脾の存在が考えられた。その後の CT でも同部に小結節像が確認された。脾摘後に代償性に増大した副脾の同定に脾シンチグラフィが有用であった。いずれの症例もプラナー像に加え、SPECT 撮像を施行したことで、副脾への集積がより明瞭となり、CT との比較も容易となった。